固有名詞にみる社会変動
——近代日本語圏における漢字の潜在的諸機能——

ましこ・ひでのり

「つづり字発音」とは正書法の影響でもともとの発音が変質してしまう現象が、無モジ社会以外では普遍的に目にするものだ。とはいえ、近代においては、この「つづり字発音」はアルファベット圏はもちろんのこと、伝統的漢字文化圏でもみあたらない、独自の性格をもってきた。近代日本における漢字は固有名詞をおおいかぶさり、あらたな発音をつくりだす。そして、そのあたたな発音は伝統的発音をほうり出すのである。このことは伝統的発音への圧力という点で、アルファベット社会における「つづり字発音」とは決定的にちがっている。いかえれば、伝統的固有名詞の記憶すべてを抹殺し、まるでむかしから新型発音がつづいてきており、あらたな領土が固有の領土であり、そこに住む新住民がすんできたかのようにおもわせるのである。在来の固有名詞は俗っぽい、ないしは時代おくれだと、また在来の住民は存在しないか、しなかったとみなされるのだ。

近代日本における漢字は固有名詞群を変質させ、ついにはマイノリティの言語文化全体をほとんど変質させてしまう。固有名詞の変質はマイノリティの言語文化全体のまえぶれだったのだ。近代日本において具体的にいえば、アイヌ／琉球人／小笠原在来島民（ヨーロッパ系／カナカ系）、および在日コリアンなどが、規範的な均質的な日本文化に、ほんと全面的に同化をしいられた：固有名詞文化にかぎらず言語文化のほとんど全域である。わが世代になればなるほど、日常的言語文化への同化圧力がおきくなっていく：祖父母世代は希望をうしない、父母世代は気力をなくし、こども世代は日本の支配的言語文化になじんできている。はじめは、漢字によって同化した固有名詞群はマイノリティ日本人の者差別／侮蔑／攻撃をさけるためのカモフラージュ装置だった。しかしのちには、カモフラージュの仮面はほんもの顔に変質した：わが世代は「日本語人」になってしまったのである。

近代日本における漢字は日本領土にくらすマイノリティを同化する装置だったし、いまそうである。そして住民たちと領土をあらわす漢字名は、それらが日本的であることを正当化する道具だったし、いまもそうである。

キーワード：在来言語文化、つづり字発音、日本語漢字
1 はじめに——つづり字発音の知識社会学的再検討の必要性

鈴木孝夫は言語学上の概念「綴字発音（spelling pronunciation）」をつぎのよう
に知識社会学的に定義した。

「教育が国民に普及し、文盲が減少するにつれて、表記と発音のずれに関す
る充分な知識を持たないものが、慣行を無視して、ある特定の言葉の表記を自
分の持つ一般的な読解力に従って、書いてある通りに読み始める現象」（鈴木
1975：59）。

さらに鈴木は「郵便、鉄道、放送といった全国的な拡がりを持つ、地名を扱う機
関が、いわばそのものの発音を、現地の人に強制してしまう例は世界共通である」
と、〈社会的事実〉を一般化している（鈴木 1975：61）。

たしかに、どのことば／モジで地名／人名をしるすかの選択は、ほかの地域を自
分の土俵にまきこもうとする主体間でのヘゲモニー闘争となる。一般に、政治経済
的に優位な地域のことば／モジをリードする知識人（文筆業／官僚など）が、出版
資本主義や公的諸制度（ビューロークラシー／公教育など）を背景に、諸階層／諸
地域をとりこんでいくことは、近代に普遍的にみられる現象である。その点では
本論考のねらいも、「つづり字発音」という普遍的現象のなかで、日本語漢字が近
代においてはたしてどの機能を再評価することにある。しかし、「よそのもの」に
よる固有名詞を「現地の人に強制してしまう」冷徹な趨勢を所与のものとして、あ
るいは知的好奇心からのみとりあげるのでは、社会変動の暴力性を免罪することに
なるし、マイノリティの権利もまもれない。知識社会学的「強制してしまう」主
体ないし構造をときあかし、マイノリティの権利と希望を回復できるような理論化
がのぞましい。本論考は、近代日本がまきこんできたエスニック・マイノリティおよ
び日本「内部」の地域の固有名詞の変動の具体例をみていく。そこには、「よそ
ものの発音」つまり日本語漢字システムがせた標準語音を、「現地の人に強制
してしまう」プロセス、みかたをかえればマイノリティ文化的の独自性の崩壊が、う
きぼりになるだろう。それは同時に、国民国家形成の功罪をとらえかえす作業とな
るはずである。

2 漢字という装置の潜在的機能

漢字がおもむね歴史的機能をはたすことは、もとより地名研究者たちにとって死
活問題であった。たとえば、国語学者鏡明克も、「北海道のアイヌ語地名は、ア
イヌ語という日本語とは異質な言語構造の言語にむりに漢字をあてはめたために、
アイヌ語の発音と漢字の音訓にずれがあって読みにくく、あるいはその漢字に
よってアイヌ語の本来の発音からずれてしまったものが多い」と、初学者に注意を
うながしている。また漢字があてがわれる際に「変形したり、長い地名を下略する
など、アイヌ語の原形をいちじるしく失っている地名が少なくない。たとえば、オ
ペレペレケ（川尻がいくつにも裂けているところ）→帯広などがそうである」な
どとも指摘し、日本語地名として編入されていく過程で、さまざまな文化破壊がす
められたことをにおわせてもいる（鏡味1984：61-2）。

ただし、鏡味ら地名研究者がなぜこういった漢字の潜在的機能にこだわるかをこ
まかに分析していくと、由緒ただし地名は是が非でも保存すべきであるという文
化財保護イデオロギー＝地名研究者の利害からでできた結論ではないらしいこと
が、わかってくる。たとえば「漢字によってアイヌ語の本来の発音からずれてし
まったものが多い」との指摘にすぐつづけて、「そのいずれを大きくしたのは」北海
道へと大量に移住した「東北方言の使用者によって、アイヌ語地名の文化化がかな
り行われた」ことだとなるとく（鏡味1984：61）の如だ。もともと、あるアイヌ
語地名にたとえばツキサップというかながきをあてたこと（＝標準語音韻を反映し
た転写）自体、音韻体系の実態をぬかめているわけで、すでに「綴字発音」がはじ
まっている。音声学の専門家以外、「表記と発音のずれ」について正確な情報はも
てない以上、「自分の持つ一般的な」音韻知識に従って、書いてある通りに読み
始め」ているからだ。「東北方言」によって「文化化」がおこなわれたことが漢字
の標準語をみておかしかに語源解説しようとする。地名研究者一般の後腺になるこ
とは、いえるかもしれない。しかし地名研究では、本来言語学の要密な資料批判に
よって〈本来の音形〉が復元されるのだから、標準語音韻を反映したかながき転写
そのものが批判的対象となるはずだ。アイヌ語／標準語、アイヌ語／東北諸方言の
それぞれの音韻体系の距離は理論的には本来ひししいはずで、「東北方言」による
「アイヌ語地名の文化化」という歴史的事実は、かならずもし「本来の発音から」
の「ずれを大きくした」〈主犯〉そして納弾されるべきものではない）。

またこうした意識の根底には、地元住民の共時的言語感覚から遊離した〈地名フェティシズ
ム〉がひそんでいるといえる。

そんななか言語学者田中克彦が「漢字の日本占領は」「規範の感覚を伴って法的
に登録されてくる」と、アイヌのような少数民族はもちろん、各地のニッポン現地人
の固有名詞、すなわち、かれらの母語の一角を削りとっていく作用をよぼすこと
になった」と批判した（田中1983=1992：147）。田中はその変革装置として「オ
ン・クン二重の読みを内蔵した漢字面であるという通念」を指摘している。そして
、「このオン・クン漢字で記されるや否や、いかに隔たった異民族の土地でも人間でも
日本語にとって親しい、ときには日本国、日本人そのものか、それに準ずる地位を
得ることができる」のであり、それは「異族・異域を、観念において日本語・日本
文化の所有物と化すための、不可欠の道具であると規定」した（同上）。すぐにお
いとうかべられるのは、戦前東アジア地域に「創氏改名」や地名変更などをおこ
なった、文化的暴力である。しかし、そういった植民地は帝国主義日本の敗北に
とって「解放」された。地元住民の生活感が実態としていきづいていたからである。
つまり問題は、戦後も日本人が撤退せず解放されなかった「異域」であり、また
「各地のニッポン現地人の固有名詞」などであった。

ところで〈郷にいえば郷にしがえ〉には限度があるから、〈つまり〉＝現地の
固有名詞文化を新顕たちがまねしそこなうことが必然的にうみだされる。こういった固有名詞の〈ビジン（当座の妥協型）化〉までは「世界共通」の〈社会的事実〉だといえよう。ただし、それはあくまで「（外来者による）発音と（地元在来の）発音のずれ」をゆるす、あらたな「慣行」＝〈均衡＝あゆみよるの産物〉にとどまっていた。ところが近代日本のばあいは「月寒」という漢字があてがわれることで、ツキサムという〈発音〉が〈捏造〉されたりした。もはや「よそものの発音」という次元でなく、「よそものの地名」にとってかわられる力学へと変質していっているわけだ。つまり標準語文化が戦後も撤退しなかった（あるいは復活した）地域——エゾ地／琉球／小笠原の在来島民——、そして「各地のニッポン現地」における「固有名詞、すなわち、かれらの母語の一角を削りとって」いった過程は、それだけにはとどまらなかった。固有名詞の〈ビジン化〉は、ついて地元住民の日本語化／標準語化（世代交替や準拠集団変動など）によって、〈クレオール（生育語／生活語）化〉へとすんだからだ。つまりそれは、伝統言語の運用能力／状況の変質・空洞化がすすむことの不吉な〈かけ〉でもあったのである。

3 アイヌ／琉球／小笠原への日本語圧力

歴史研究のハンドブックのひとつは領土問題を総括するなかで、「北海道」を「古来からの日本の領土であって疑うものがある、いわば公理のようなもので、その事実を文書的に証明することもできず、またその必要もない」などと断言している（百瀬1990：1）。しかし「北海道」については、「国際法上」の「実効的支配」という規定によって、松前藩による支配領域は海岸部にすぎず、「内陸部」は「依然としてアイヌたちの自由な天地だった」。ただ、ロシアとの国境線確定に着手していた幕藩体制をひきつつかたちで「政府と開拓使はすでに北海道は日本領化したもの」とし、「土地所有権、漁業権などを設定していくことによって、アイヌたちの生活とその領域を奪っていた」にすぎない。 「北海道」という名称自体、「蝦夷を〈かい〉と読み、これに海の字をあて、北陸国に真似てつくったものにすぎないので、」五代七代の類似の行政区分に類似した呼称によってあたかも蝦夷島が歴史的に日本領であるかのような錯覚をうますざる効果があった」（田村1985：135-7）。それは「異域」であった空間の「政治理論上での『内国』化を意味しており、伊達藩が宮城県と改称された」ような「本州以南の例とは全く異質な政治的意義をもっていた（海保1992：18）」。

そして「北海道」には、屯田兵をふくむ和人入植者たちが大量にとなわれこんでいった。その結果地元の地名は、① 和人たちがアイヌによる現地名とは無関係になげたか（シ・コツ＝「大きな窪み」→「死骨」を連想させると、きらわれて、『千歳』や「亀田」などに）、② アイヌによる現地名に、むやみ漢字をあてがったか（『月寒』のほかにもオタ・ノシケ＝砂・中→大楽毛、オタ・シ＝ライフ＝大・川→歌志内ほか多数）、③ アイヌによる現地名を翻訳し、むやみ漢字をあてがったか（オタ・シ＝ライフ＝砂・大・川→「砂川」市などほか多数）といった大体3パ
ターンの変質をこうむった（[鏡味1984]ほか）。つまり、漢字が決定的な媒介装置となっていることは、うたがいえない。すでに引用した田中克彦の「このオン・クン漢字で記されるや否や、いかに隔った異族の土地でも人間でも、日本語にとって親しい、ときには日本国、日本人そのものか、それに準ずる地位を得ることができ」、それは「異族・異域を、観念において日本語・日本文化の所有物と化すための、不可欠の道具」であるとの指摘が、まさにひっつきあてはまる6)。

明治政権による政治的支配は、漢字地名おしつけ＝地理的編成がえには当然とどうたらなかった。のちに、琉球ほか、アジア植民地全体にあてはめられた、基本原則（天皇の赤子としての「一視同仁」）のあらわれとして、いわゆる壬申戸籍への編入（1872-4年ごろ）＝人格的支配がはじまる7)。「日本」式に記載されたのはいうまでもない。そこでも同化装置の道具としての中心は漢字表記だった。(a)「チツロ」というような転写とともに、「知都権」とあたえたケースから、(b)「トサンホク」というような転写をしながらも＜本名＞として「戸権録平」と漢字をあてがったケースをへて、ついには、(c)本来のなまえの転写をせきできれ、ただ「登喜良武」という原音が復元できない漢字表記と、「伊藤時蔵」という和人名をあてがうケースへとつながっていく（海保1992:20）。すでにのべたとおり、外来モジによる転写では、現地音を反映しきれない。まして漢字のおしつけは、現地が伝統的に地元民の土地でないようにみせる魔術をうみ、しかもマジョリティの発音のくせをせおっていることで、致命的な変質をもたらす（段階(a))。しかし、日本人のやったことは、日本的ななまえを漢字であげることがあった（段階(b)(c)。1876年には「日本式姓氏の使用」＝＜強制＞の「布達」が伝えられている（同上：119)。

つぎに国民国家「日本」の北辺から南辺へと目を転じてみよう。琉球諸島は、天皇制からは自律的な王国として明／清との冊封関係（華夷秩序のもといた君臣関係で、朝貢貿易をゆるやかにする）をつづけていた。1609年に薩摩藩によって軍事制圧され、与論島以北の奄美群島は割譲され中綴島以南も管理下におかれたが、一定の自治をゆるやかにしてい、文化的独自性は相当維持された。朝貢貿易自体も薩摩藩主導で撫養の対象ではあったが、明／清との君臣関係＝冊封体制には変化がなかった。現段階での琉球史の専門家の主流は「幕藩体制下の＜異国＞」という把握である（琉球国王／徳川将軍の代わわりごとに使節が薩摩藩にともなわれて江戸にむかったことや、キリストの禁止の徹底など）。ところがそうした「両属」体制は国民国家の編成過程で清算され、「沖縄県」として中央集権体制に編入された（「琉球処分」1879年）。それでもなお19世紀いっぱいぐらいは、さまざまな抵抗（清への王命・処置／不服従／旧国王を世襲の知事とする特例要求など）をこころみたが、すべて不発におわると、一転、帝国日本の価値秩序に主体的にのみこまれていった。来県する他府県人＝新参者が、「方言」を外国語のように感じ問題視し、同時に、地名／人名も＜ヘン＞だと差別する態度も、積極的／消極的にうけいれられている。

もとより『難読町村名』はもちろんのこと、そして『全国市町村名の呼び名』と
いった辞典ができること自体、漢字地名は歴史的であって〈ちがい〉をゆるさない「ひらきなおり」がゆるされてきたことをしめしている。「東海林（ショージ）」といった名字や、「貞知」とのくみあわせを〈ただかず〉とよませるとか、人名も同様である。要するに、「この漢字はこうよまされるのだ」と、地域／一族／なづけおや／本人がいいはばとあるという、アーチキズムがまかりとおってきた。ところが沖縄諸方言にかぎっていれば、短母音が基本的に／アイ／／音でみたってられるという、「本土」諸方言とはかなりへだたった音韻体系を独自に展開してきた（藤垣津支配による人名／地名への圧力とその影響はおく）。その結果、（1）田島／浜／山田／山口といった、漢字／よみを「本土」と共有するごくわずかなケースもあったが、（2）読谷山（ユエンタンザ）／瑞慶覧（ズィキラン）など、使用漢字／音列／音韻ともに「日本語」とはおもえない、相当〈おかしな〉な地名／人名がすくなくなかった。いや（3）アブ（阿部）、ウィーバル（上原）、ウフタ（大田）など、「本土」でおなじみの字面のものでも、音韻体系のちがいからとてもおなじ漢字のよみとはおもえないものがおかかったし、ほとんどは（4）屋嘉比（やかび）など、なじみのない漢字列や、タマグスィック（玉城）など、一部はよみが一致するものの、のころはどこか〈おかしな〉よみをかかえこんでいるのが大半だった。理屈では〈この地域では、この漢字はこうよまされるのだ〉といいればとおるはずだったが（[宮城 1991] など）、もとは被差別意識からあずき、同化教育でえた知識をもとに、主体的に地名／人名の、改名／よみかえにはいった。

改名はおくとすると、〈よみかえ〉は、規範化した標準語の漢字＝よみ体系に、あわせる／ちがえるという手法がえらばれた。うえの（2）～（4）をつぎのようにある。

（2）読谷山（ユエンタンザ）→ヨミタンザ→ヨミタン（読谷）、瑞慶覧（ズィキラン）→ズケラン（がんぱったわりには中途半端で、伝統／「本土」いずれからも違和感）

（3）ウフタ（大田）→オタ、チシュムトウ（岸本）→キシモト、フッチャー（堀川）→ホリカワ、ウルカ（砂川）→オロカ→スナガワ、ヤマガ（山川）→ヤマカワ、ヤマチ（山内）→ヤマウチ（これで「本土」と区別がつかなくなった）

（4）ハンジャ（波平）→ハヒラ→ナミヒラ、フィジャ（比嘉）→ヒガ、ンジ（伊芸）→イゲ→イゲイ（イゲイ）、ウンナ（恩納）→オンナ、ヒャーグン（比屋根）→ヒヤーネ→ヒヤネ、ティーラ（照屋）→テルヤこうした、よみかえから、おきたことは、つぎのようにまとめられる。

① よみかえは、識者の提言にもかかわらず、あしなみがバラバラだったから、カナグスィック（金城）→カナグスク→カナシロー→カネシロー／キンジョーとか、タマグスィック（玉城）→タマグスク→タマシロー／タマキのように、ふたとおり以上の〈よみ〉が共存するという混乱がおきた（/ji/ではなくて/si/という音韻に機能していることに注意！）。
また、フナキシ（富名腰）→フナコシ→（船越）といった、音韻変化によるよみかえをへて、「本土」風の漢字にかえられててしまうとか、アブ（阿部）→アベ、ウィーバル（上原）→ウエバル→ウエハラ、ウフナー（大庭）→オーニワ→オーバ、ガブ（我部）→ガベ、フクジ（福地）→フクチのように、「本土」でも通用する〈よみ→ゴチック部分〉にもかかわらず、より「本土」風にちかいかたちへとひきずられたりした（「〜バル」という地名は九州地方に散在することに注意）。

② 人名は比較的はやく、よみかえがすすんだのに、地名は保守的で戦後までかわりにくかった。そのため、地名にねぎることがおおかかった人名が、地名とズレをおこし、混乱がおきた。新城 [アラグスク／アラシロ・地名] [シンジオー・姓の一般形] など。

③ 地名も、戦後、標準語にあわせようという意識がはたらき、よみかえがおこった。ところが、これも、人名とおなじく、ふたとおり以上の〈よみ〉が共存し、地域ごとに、くいちがう（浦添市字西原 ［ニシハラ］／具志川市字西原および竹富町字竹富小字西原 ［イリバル］）とか、村とそのなかの字がくいちがう（具志頭 ［グシカミ］村字具志頭 ［グシチャン］）か、字とそのなかの小字がくいちがう（具志頭 ［グシカミ］村字新城 ［アラシロ］小字新城原 ［アラグスクバル］）などの、混乱がうまれた。

これらは、地元でウチナー・ヤマトゥーグチ（沖縄大和口）とよばれる新方言（伝統方言の音韻／文法などの影響をよく受けた地域共通語）へと、生活語がきりかわっていった近代化過程と並行しておきた、固有名詞意識の変動である。そこでは、① 短母音３音体系が５音体系にひきずられるにともなって、標準語体系にとって、外来音節はいった現在でも〈異物〉であろう「ティ」「トゥ」などが「テ」「ト」へと変質し、②「チャン」など標準語になじまないものがさけられ（ただし、元来「チャン」だった「喜屋武（一国会議員の姓）」などは、変化しながらも「キャン」と異質なまま）、③「ニシ」というおとから、伝統的な「北」ではなく「西」をイメージする、わかい世代をうめただすなど、革命的といっている変動がくくりひろげられた。そして、そこには、標準語における漢字／オトの対応関係が、色こく影響をおよそしてきたといえよう。

このように、旧「琉球王国」地域は旧支配勢力が準拠集団をきりかえ、中央からの同化教育に主体的＝積極的にかかわったことで、旧被支配層の大半も、文化的断絶にねぎれた異質感をかかえこんだながらも「日本人」になろうという志向性を基本的に維持してきた。ヨーロッパ的な国民国家の基準（ことばや生活習慣の連続／非連続）によるならば、別国家が形成されても不思議でない非連続性をもち、また歴史的／政治的経緯からも、十分にその可能性がみてとれた旧琉球王国史図だった。しかし19世紀末の決定的な機会をのがしのしたあとは、地元住民の主体的な同化志向が大勢をしめ、分離独立運動がおおきなうねりになることはなかった。住民は故郷にとどまりながら、みずからが移民したか、あるいは大量の植民者をうけいれただか
のように、地名／人名の日本化をお願いしたのであった。
また、一様にみのがされている地域として、小笠原諸島があげられる。いくつかの文献もあるが、地名の日本化は一見一方として、① 幕末よりまえは、無人島に漁民が漂着するか幕府による巡検／地図作成がおこなわれていたので、② 19世紀になるとヨーロッパの捕鯨船の寄港地になり、最初に見つかった（1830年）のもヨーロッパ人などであった。
③ 幕末には領有をめぐる英米間でのあらそいさえあった。ペリーが遠征したとき「小笠原に住んでいたのは31人。アメリカ人、イギリス人、デンマーク人、イタリア人、ハワイの原住民ベイン人・カナカ人がで、日本人はひとりもいなかった。ペリーはここを調査・記録しながら占領しなかった」。結局1875年「明治政府はここに外務省の田辺太一を派遣。日本への服属をとりつけ、翌年、領有を宣言。反対する国がなかったので確定し」、さらに「明治政府はこの島に開拓移民を送り込む、先住の欧米系住民には「退去か帰化か」を迫った」。結局1877〜82年のあいだに、「全員が帰化させられている」（佐藤1988：155）。
こうした経緯にもかかわらず、「彼等は「帰化人」として差別され、八丈や沖縄、本土からの移民によって本村を追い、奥村に封じこめられる。彼等が小笠原で自由を得るのは、戦後、アメリカ軍が占領してから」なのだ（同上）。戦時中は、差別されながらも軍事的召集をうけ、召集をうけなかったものは米軍の攻撃目標となった島から疎開させられた。髪・肌色／宗教などが異質であることを理由に、島のなかでさっ差別をうけたのだから、軍旅隊／疎開先で差別をうけたのはふたつでもない。日本敗戦によるアメリカ軍統治は、当然「天国のように」うけとめられたし、1968年日本に「仮還」されるときには「その不安は計り知れもなかった」ようだ。「子供たちは統治国アメリカの教育を受けているために、英語と日本語が混合した会話をして、また、言語の読み書きがほとんどできなかった」という事情もあったからである（黒須・服部1992：146-7）。住民は「帰化人」として新参者に差別されるという構造は、アイヌのぼあいと同形であることがわかるであろう。もちろん、欧米系／太平洋系先住者のなまえは非日本的であった。当然いわゆる「創氏改名を強いられた」（同上）。つぎのようにである。
Savory→瀬掘、Webb→上部、Washington→大平／木村／池田
ちなみに、「Webb→上部」は、最初「うわべ」と発音していたのに、役所の手続きミスで、「うわべ」となったらしい（同上）。「瀬掘」も、「せぼり」と「日本化」を考えていているとはいうまでもない。原音にちくあたがわれた漢字を媒介に、より日本の音形に変形されたこうしたプロセス（鈴木孝夫のいう「突然変異」）。ここには、アイヌほか北方少数民族のこうむった社会変動とおなじく、大量の植民者によってとりかかれ文化的マジョリティに同化吸収させられた典型的なすがたがみとれる。
こうしてみてきたとおり、北方少数民族／琉球列島住民／小笠原在来島民たちは、地元において少数者であったかどうかは別にして、公教育によって、地元の生活語
（民族語／方言）がおおやけでは通用しないこと、進学／就職のあしかぜにしかならないことをふきこまれた。あたらしい世代はだきりくずされて、世代間の断絶をふかめていったことは、いまだもない。マジョリティがあてがった日本的な配字／よみかたによる漢字人名は、はじめは差別を最小限にやりすごす〈保護色〉だったかもしれない（現実の日語的差別はおく）。しかし若年世代の日常生活語は標準日語の圧倒的な影響力のもと、日本語／来在語によるバイリンガル状況から標準語／新方言によるディグロッシア（diglossia）状況、「同一」言語内での相補的な機能の共存（聖／俗、公的／私的、……）へとときかわっていく。よその決めに、固有名詞を標準語の音韻にできるかぎりかかげて（＝固有音をなまらせ）発音してみせることができ、非日常の〈せのび〉ではなくなったとき、在来の固有名詞文化はもはや半死半生であった。在来言語がくりひろげられる空間がせばまりコミュニケーション実態の質／量がおちくむにつれて、在来の田名／地名の語源について一般的知識をそなえたうえで伝統的音韻で固有名詞を駆使する、必要も能力もたたないものが世世代の大半をしめる時期がくる。そのときには日本的な人名／地名にカモフラージュするための〈保護色〉だったはずの漢字表記は、もはや〈はずれない仮面〉といえた。

4 方言地名（現地音）への圧力

さて、以上、近代日本がかかえこんだエスニック・マイノリティの言語文化への同化圧力をみてきたわけだが、そういった力学は「内部」へもはたかった。

1950年ごろ三重県尾鷲市を「イオワシ」と読むか、『オワセ』と読むか、NHKの放送用語調査委員会で問題になったことがあるという。現地の当時の方言音では「[s]」と「[ʃ]」との間の音」だったが、「おおまかには[owaʃe]と書いて」もさしつかえない程度の問題だったらしい。「現地音主義をとっている」NHKの原則でさえも「[oɪwaʃe]と読むことに」なりそうだが「東京共通語には、[ʃe]という音節はないから」「できない」。それで、「オワシ」「オワセ」の選択をせまられた。結局「市制を施行したときに公式に「オワセ」と決まり、NHKもそれになった」ようである（柴田1958：77-80)。

柴田武（1958）は、それぞれの音韻体系が

東京 sa ji su se so ʃa ju ʃo
尾鷲 sa ji su ʃe so ʃa ju ʃo

と対応しているのだから、「東京共通語としての『尾鷲』の読み方は、『オワシ』よりも『オワセ』の方が妥当だ」と、NHKの判断を肯定している（同上）。1958年当時すでに「老人の層ではまだ『オワシェ』であるが『若い層では『オワセ』の方が優勢になりつつ」（同上）あった動態は、現在後者が圧倒的多数をしめるにいたった。NHKの判断は「現地音主義」をさきとりしたかたちとなった。

1948年NHK編集の『全国市町村名の呼び名』では「オワシ（オワセ）」とし、されており、地元でもまよいがあったことが反映されていた。また1950年には尾
鷲町会が「オワシ」と一旦きめたのち、1954年、尾鷲町から尾鷲市になるときには、「オワシ」と、きりかえられたのである（その後はこれが「正式」な呼び名）。1958年当時でさえ、「外来者の便を図って、『驚』を訓の通り読むことになった」ためか、国鉄尾鷲駅はまだ「おわし」であった。国鉄松阪駅には「おわし行き」「おわせ行い」ふたつの掲示さえあったという（同上）。そして、おそらくも1970年代なかごろには「おわせ」にかえられていたらしい（20年以上勤務しているという「尾鷲駅」職員ののはなし——電話インタビュー）。

ここで注意したいのは、『難読町村名』（NHK 1939年）、『都市町村名便覧』（建設省地理調査所1948年）、町名（尾鷲町1950年）、駅名（国鉄尾鷲駅1958年）などにあらわれる「オワシ」が、当時老若たちが発音していた「現地音」＜オワシェ＞の反映ではなくよそものが「「驚」を訓の通り読む」との反映であるという点である。標準化された漢字／読みの固定化と「現地音」のズレがここにあらわになっていることがわかる。

それに対して、尾鷲市誕生（1954）以後の「オワシ」は、① 標準語音にはない[je]／かながきとして公認されていない「しゅ」をあらわすために、対応する[se]／「せ」をえらんだことの反映であり、② それは、「若い層では「オワシ」の方が優勢になりつつある」という地域社会の変動（社会意識／言語意識の変化）の反映なのである。そして、[je]／「しゅ」→ [se]／「せ」という、勢力変化（世代変化）にもかかわらず、駅では「外来者の便を図って、『驚』を訓の通り読むこと」という、つきいわけがなされていたことは重要である。「驚」を「わせ」とよませること（ひらきなおり）には、抵抗があったことの証拠であり、そこには「驚」＝「わし」という、標準語の漢字／読み体系の、地域への権威がみとれるからである。[waje]という現地音に、いつごろ「驚」があったかわたったのか、文献学的／方言学的研究の必要だろうが、いずれにせよ、ひとつの国民国家形成における、漢字／標準語の潜在的機能と「意図せざる結果」だけはみてとれる。そしてこうした圧力は「尾鷲」にはとどまらなかった（それが劇的なケースにしても）111）。

5 「在日コリアン」による「日本語人」化傾向と異質化戦略の可能性

さて、朝鮮半島および中国東北部などの地域は、日本の敗戦によって解放され、従来の地名等（国民国家内部での地域差別／民族差別はおく）をとりもどすことができた。しかし、でかさぎのもつが終戦時日本国内に生活の根拠をきずいていたり、強制連行から解放されても半島の政治状況や出身地での生活基盤の問題などから帰国をあきらめたひとりひとりが数万人にものぼり、子孫とともに日本語文化にとりかこまれてくらして来た。

1984年に実施された神奈川県在住外国人実態調査、そのほか10年後の第3次在日本大韓民国青年会意識調査（全国調査）といった大规模調査、また福岡安則らによる「3世」世代のききとり調査でも、「在日コリアン」の大半がいわゆる「通名」
を使った、かつちいて（つかいわけて）いることはあきらかだし、わかい世代の日常生活はおもに日本語によっていとなまれていることがたしかめられる（金原ほか1986, 福岡ほか1991, 福岡1993など）。こうした状況は「在日華人」たちといちじるしい対照をみせており、その歴史的な主要因がどこにあったかについては即断をさけなければならないが、祖国のことをを駆使する能力と日常生活における使用実態が低下してきたことと並行していることだけはうたがいない。祖国語だけのコミュニケーションしかしない／できないのは、日本そだちの「在日」にはありえないし、祖国語を中心にくらしきつけている層さえ例外的といってよい。そして日本式の「通名」は、「創氏改名」によってうまれ（歴史的経緯），また差別をやりすごす方便だったという歴史的機能を変質させ、いまや「なじんでいる」とかんじているほうがあいがなくなる。それどころか親世代から「通名」でしかよばれたことがないのが大半という世代さえできあがっている。

したがって、民族名でなければならないとか、民族語をうしなってしまったものは日本人とかならないといった原則論にこだわるひとびともいるけれども、「社会的事実」として（つまりことの現実は別にして）「在日コリアン」の言語文化はかなりの「日本」化をすすめていることがたしかめられる。在日二世までのように、差別をのがれるための「保護色」＝「方便」として「本名」とつうかわるなら別として、三世以下のように、「日本語人」（姜1990）として日常生活をいきているばあい、日本的な漢字名はほかのマイノリティと同様に、〈もはやはずれない仮面〉といえよう。たとえば「林英和」という字面を「実は [(r)iN joNhwa] とままざる」のだという在日一世／二世たちのおもいれは、結局のところ、三世以下が意識的にバイリンガルになるようにする意欲と、それを可能にする能力／社会環境とがそろわなければ、みなならないという現実がある。「林英和」のばあいなら

| 日本式人名（完全同化型） | 1 [hajaji ɕidekazu] | 2 [hajaji ews] |
| 姓にエスニック痕跡（同化移民型） | 3 [riN ɕidekazu] | 4 [(r)imuɕidekazu] |
| 名にエスニック痕跡（結婚／養子等） | 5 [hajaji joNhwa] | 6 [hajaji joKhwa] |
| 日本語音韻によるエスニック人名 | 7 [(r)iN e:wa] | 8 [(r)imu joNhwa] |
| コリア式人名（祖国準拠型） | 9 [(r)im joKhwa] |

といったくみあわせ＝よみかたが想定できる（厳密な音声学表記ではない。以下同様）。一般には、⑨だけが民族的であるというよみかた（言語学／民族学や、本国のたちば）か、③〜⑧で十分異質性をういちだせるというよみかた（三世世代の運動家などのたちば）に対立しているようにみえるが、前者はあまりに理想主義にすぎるし、後者は「林英和」という表記の社会学的文脈／力学をかるくみすぎている。

まず地域文化自体が歴史的に不変でなくいない。故地自体が、内部展開にくわえて外部との相互交流によって変質していく運命にある。したがって、移住さきでなお、集住等によって故地から出発した当初の文化を純粋に保持しても、かえって故地自体の内部展開／相互交流とのズレがうまれさえる。まして、移住さきのマジョリティ文化の影響をすべて排除することは、ほとんど不可能である。つまり本
国文化とは自律した展開をしめすことが自然という、厳然たる「社会的事実」が確認されるべきであろう。

逆に、さきに指摘した田中克彦のモデルからは、漢字をひきずるかぎり、「訓読み」という装置によってほとんどの漢字が「日本化」されるという構造がみちびきだせる。女子名には限界があるが、「○○とよませる」という訓読みの恣意的伝統をかりれば「日本的な名前」とあつかもことはかなりの範囲の漢字について可能なので、「日本的」か非「日本的」かは、さかいめが意外にあいまいな連続体をなしていることも確認しておく。

以上の理由から、クレオールがおかれている社会言語学的劣位が解消されない以上、⑨のかたちをバイリンガルとして実践しないかぎり、故国から純粋に「民族的」とみなされることは不可能であろう。また移民さきにとどまりながら母国から差別をうけないバイリンガルを人為的に再生産する運動は、それ自体不自然であり、絶対的さきをまとうことがない。まして、多数派日本人とは異質化するという意志が大勢としてうしなわれれば、①②という完全な同化へとおちつくだろう。

逆に、母国そだちの「同胞」がどのように差別しようと、「在日には在日の生活文化がある」とひらきおり、同時に多数派日本人に脱色されてとけこむのはごめんだという意識がのこるかぎり、③〜⑧という異質化戦略がとられるだろうし、それはある程度成功するだろう。ただし、こうした戦略にとって漢字にたよることは自然をまねくおそれがある。「李」「朴」といった「異質」な姓ならともかく「崔」をティク/とよませたいとねがっても、/sai/と「日本語よみ」されたら、もともとこないからだ（世代交替による自分の子どもたちの意識の「日本化」も並行している。「チェ」ないし“chae”といった表記法がのぞましいだろう（ハングルに反映された祖国の標準音韻に義理立ててしまうと、「在日」の実態からかけはなれた「せのび」におわるにちがいない）。また「李」「朴」といった「異質」な姓なら大丈夫といった楽観もできない。姓にエスニック痕跡をのこす同化移民型（③④）は、逆にいえば、かながき／漢字がきて、日本名を自然にかんじる文化的同化（語源意識／音韻認識）の進行をうらがいているわけであれば、姓にだけはエスニック痕跡をのこすという戦略が、そのつぎの世代につながるか保証のかぎりでないことを指摘しておく。最近の三世世代では、民族名にこだわるひとととでも、こどもの命名に日本的によませても不自然ではない漢字列をえらぶのがすぐなくないという実感を耳にしたことがある。これは漢字にたよらない音声イメージ（image acoustique=signifiant）だけで民族語イメージ（concept=signifié）が喚起されるようなつながりを彼（女）らがはじめから指向していないことをうかがわせる。「日本語人」[姜（キョー）1990] 化は、日本語漢字文化の骨肉化であり、それをあまたみた異質化戦略は、次世代にうらざられることをだろう。

こうした大状況／戦略は、ほかのマイノリティについても参考になるはずである。
6 おわりに

さて、以上、マジョリティからみた「異質」な固有名詞への圧力——標準語音をせおった日本語漢字文化——の具体例をみてきた。本論考では「強制」主体を特定することはできていない。「郵便、鉄道、放送」など「地名を扱う機関」以外に、公的機関（教育制度／役所などのエージェント／クライアント）および出版市場（地図、辞典類、教科書など出版物の出版社／執筆者／消費者）の具体的記述／分析がのこされている。しかし、漢字および標準語という媒介装置が規定する「強制」構造の一部はすくなくともうきぼりにできただろう。また、「在日」の異質化戦略の可能性も抽象的ながら提示したとおもう。

漢字＝儒教文化圏は、伝統的に「中華コンプレックス」をひきずっていた。しかし、それは書記システムとしての漢字文化（漢文／漢詩）と儒教理論／理念についてあって、本国首都の支配層の発音までまねねばならない規範にしてこなかった。かきことば共同体としてのラテン語空間も各地のなまりを許容していたが、あくまでもアルファベットがオトを規制しており、基本的にはなせる共通語でありつづけた（カトリック教会は依然そうである）のと対照的である。しかし近代国家としての「日本」は、「本国」をふくめた漢字文化圏、いわし以外にさえ日本的な漢字文化（標準語による漢字かなまじり文）を輸出／強制しようとした。はなしことばとして相互理解不能な発音差を許容してきた漢字文化圏の伝統を厳格的にかかえたのだ。それは、各地のディプロマシア状況（領域による高級言語／日常言語併用状態）を否定し、標準日本語でかんがえ／はなす生活をしめる志向性をはらんでいた。マイノリティのがわが、より主体的にこういった「日本化」をえらんだにしてもそこまでおいてこんだのがマジョリティ日本人であったことにちがいない。

[ただしがき]

1）鈴木孝夫が、アイヌ地名である「ツキサップが初めから一貫して仮名書きであったなら、ツキサップという地名は生じなかった」とみとめていたなら、「よそのものの発音を、現地の人とに強制してしまう例は世界共通」なのだとひらがなおり、おそらく「突然変異型（mutation）」などと命名／分類している（鈴木 1975：61-2）のとくらべれば、その暴力性への感覚はもとにしていないというべきだろう。

2）そして、社会言語学的観点からすれば、そうした歴史的事象が、どのような実態をなしでいたか自体がアカデミックな研究対象のはずである。さらに皮肉なみかたをすれば密味社地名研究者は、漢字と「東方方言」という干渉要因が「本来の発音」にたどりつくための障害であるかのようにもふりだが、それが本音かどうか実はあやしい。〈障害〉を高級な知的ゲームとしてたのしんでいる筋もみうけられるからである。

したがって、たとえば全羅南道という漢字の字面が破壊されなかったことを日本帝国主義の容認ないし伝統重視とみるのは見当たらない。日本の「県」にあたる「道」[do] がかえられなかったのは、朝鮮語と日本語においてほぼ同音だったこと、そして「南海道」など、歴史的に日本の行政区画として名が残っていたからにちがいない。間接的証拠だが「洞」[dog] は「ドー」と日本よみすると、行政区画名のなかで同音衝突をひきおこしてしまうから「町」[mat'ji] にかえるしかなかったとかがえられる。全羅南道 [tallanamdo] が、[zenlanamdo] とよみかえられた以上、漢字を利用して実質をのっとったというべきだ。

4) いまだ死法でない（1995年現在）「北海道旧土人保護法」（1899年、1937年一部改正）という法律名＝「保護」ののもと、収奪／同化のかぎりをつくったものである。

5) さらにそれは南海道／北陸道といった領域認識を延長させる論理の近代的（発明）であり、のちに全羅南道など朝鮮語による地名さえその同類ともよく似た力学が、ここにスタートしたといえよう。また、琉球（王国）を、「琉球藩」さらに「沖縄県」とよばえていったのも、より日本的／伝統的な名称で過去を抹殺する意図がみとれる。

6) もちろん、旧「眠月」のように、ロシアとの国境問題が生じなかった領域だけが、こうした暴力の対象となったのではない。いわゆる南北両島列島と南北カラフトでは、1855年以前の日露両勢力の進出の度合い、またそれ以降の諸条約によって境界線が変更され、それにとくに日系／ロシア系移住民以外の在来民の身分もおおきに変動した。当然、住民登録／地名／公教育など、日常の言語生活にも剝製的変容がもたらされた。


8) ここでは亀美諸島ははつき、また名字／地名だけをあつかったが、個人の「なまえ」の変動もはげしかった。短母音5音への音節体系の変动にとどまらず、① こどものヤマト風の命名、② 本人自前のヤマト風への改名、③ 本土化風の男子の改名が共に存在した「ヌイスカシュン」（名乗り頭音＝漢字２字名の１字目。たとえば屋良朝那の“朝”）や、漢字２字名の音読みの風化もすんだ。太田（1983）、比嘉（1971）、田名（1984／1986）、多和田（1983）、名嘉（1983）など参照。

9) 電話帳によれば、全県からの新住民があつまる那覇市でも、伝統型の「アラグスク」が1件であるのに対して、ヤマト化した「アラシロ」が24件、一般型の「シンジョー」は461件をじめた（95％。ただし個人名のみ、94／3／17 現在で集計）。「シンジョー」とよまされる地名は、管見では鹿児島県沖永良部（おのえふる）をもとづくものだ。このことば、地名の字名にみられるだけ（ここは琉球文化圏に属する）。

10) その後、外来語が大量にかかわったことで標準音の音節体系自体にユレがおり、sa si su so ja ji ju je jo というくみかえがおこっている現在、「共通語には、[je] という音節はない」といわれるようになった。しかし『現地音』の体系自体東京のsa ji su se so ja ji ju jo という音節体系へとひきずられてしまった。

11) 田中克彦は1980年代後半の藤沢の「地図には、まだ『チョン』とか『ガル池』など、漢字の侵略に絶えている不思議なカナ書きの地名」がのこっていたのに、70年代後半にはそうした地図がいえたと指摘した（田中1983：149）。

12) イリーナ・キムによれば「組織の活動は基本的に朝鮮語によっておこなわれる」「総聯」の
「専従活動家」でさえ「事務所や学校などの公的な場所を離れると、日本語で話すのはよく見かけることであり、子供たちは下校したあと、同じ朝鮮学校にかよっている近所の子供たちと遊ぶときにも日本語を使う。また「ウィリマル（私達の言葉=朝鮮語）100%運動」など、さまざまなキャンペーンももちいて民族語保存にあたっている民族学校でも、1983年の教科書編纂にみられるように、日常語は「日本語であるという現実を踏まえた」方針にきりかえざるを得なかった（キム1994：186-9）。

【文献】（日本語文献は配列上非合理的なヘボン式と混同されないよう、50音順）
秋月俊幸 1992「千島列島の領有と経営」岩波講座 近代日本と植民地1
太田良博 1983「改姓改名運動」「朝鮮大百科事典 上」朝鮮タイムス社
海保（かいぼ）洋子 1992「近代北方史 アイヌ民族と女性と」三一書房
鏡栄（かがみ）明克 1984「地名学入門」大修館書店
樋村秀樹 1986「「京城」ということば」内海愛子／樋村秀樹／鈴木啓介編「朝鮮人差別とことば」明石書店

キム、イリーナ 1994「朝鮮総聯の朝鮮語教育」、マーハ／本名編著「新しい日本観・世界観に向かって」国際書院
金一勉（キム・イルミョン） 1978「朝鮮人がなぜ「日本名」を名のるのか」三一書房
妻（キヨ）信子 1990「ごく普通の在日韓国人」朝日新聞社
金原（きんばら）国則 1996「日本のなかの韓国・朝鮮人、中国人」明石書店
黒須伸之／服部慶重 1992「小笠原の在来島民（European-Japanese）研究（その1）」解放社会学会研究6

在日本大韓民国青年会 1994『第3次在日韓国人青年意識調査中間報告書』
佐藤文明 1981「户籍」現代書館
1988「戸籍うらがえ史考」明石書店
柴田正 1958「日本の方言」岩波書店
鈴木孝夫 1975「閉じられた言語・日本語の世界」新潮社

田名（だな）真之 1984「南島地名考」ひるぎ社
1986「地名の特質」「地名と苗字」「角川日本地名大辞典47 沖縄県」

田中克彦 1978「言語からみた民族と国家」岩波書店
1983「法廷にたつ言語」恒文社= 1992「ことばの自由をもって」福武書店

田村貞雄 1986「日本史をみなおす地域から読む国家の幻想」青木書店
多和田（たわた）真助 1983「沖縄 姓名と風土」朝鮮タイムス社

角田（のんた）文雄 1988「日本の女性名（下）——歴史的展望」教育社

名嘉順一 1983「沖縄の人名」「沖縄の地名」「沖縄大百科事典 上」朝鮮タイムス社

福岡成 1993「在日韓国・朝鮮人——若い世代のアイデンティティ」中央公論社

福岡成ほか 1991「在日若者世代の葛藤とアイデンティティの多様化（在日韓国・朝鮮人をめぐる社会学的研究）」（科学研究費補助金研究成果報告書）

比嘉春潮 1971「比嘉春潮全集 第3巻文化・民俗篇」朝鮮タイムス社

宮城幸治 1991「地名あれこれ」南島地名研究センター編「地名を歩く」ポーダーインク

宮田信子／金英達／梁泰昊 1992「創氏改名」明石書店

百瀬孝 1990「事典 昭和戦前期の日本 制度と実態」（伊藤隆監修）吉川弘文館

森田芳男 1987「韓国における国語・国史教育」原書房

安岡昭男 1980「明治維新と領土問題」教育社

（法政大学沖縄文化研究所国内研究員）
La socia ŝangīgo en proprasubstantivaro:
kaŝitaj funkcioj de ĉina ideogramaro en moderna japanio

MAŠIKO Hidenori
Hoosee Universitato Okinaņa Kultura Instituto

Ortografia prononco, kiu eatas prononcaro ŝangita pro ortografio, estas universala fenomeno. Sed la ortografia prononco en moderna japanio havas propran karakteron, kiu nek estas en alfabeta socio, nek estis en ĉina-ideograma socio tradicie. Ĉina ideogramaro en moderna japanio kovras proprasubstantivaron kaj faras novajn prononcojn, kiuj forlasas tiujn tradiciajn prononcojn. Tio diferencas de la ortografia prononco en alfabeta socio determine pri premo al tradiciaj prononcoj; tio esktemas ĉiujn memorojn de tradiciaj proprasubstantivoj, kaj kredigas, kiel se de antikveco la novaj prononcoj kontinuus, nova teritorio estus lapropra tero, kaj novaj logantoj logus en la teritorio. Oni prenas la idioman proprasubstantivaron vulgare aŭ anakronisme, kaj propran logantaron malaperante aŭ malaperinte.

Ĉina ideogramaro en moderna japanio ŝangis proprasubstantivaron, fine ŝangis tute la lingvakulturojn de minoritatoj. La ŝango de proprasubstantivaro antauvenis la tutan ŝangon de lingvakulturoj de minoritatoj. Konkrete en moderna japanio, ainaro (Ainu), rekiaro (Ryūkyū-zin), eŭropa aŭ pacifika aborigenaro (Zairai Ogasawara toomin), kaj korea emmigrantaro (zainiti korian), k.t.p. devisasimiĝi al norma kaj homogena japana-kulturo preskaŭ tute; en ne nur proprasubstantiva kulturo, sed preskaŭ tuta lingvakulturo. Ju pli juna generacio, des pligrande asimila premo al ĉiutaga lingvakulturo; geava generacio senesperigis, gepatra senkuragis, kaj ida kutimis plenumi japanan = superregan lingva-kulturon. Komence proprasubstantivaro assimilita per ĉina ideogramaro estis kanufla aparato por eviti diskriminaciojn, malestimojn, kaj atakojn de plimulta japanaro. Sed poste, kanufla maskaro ŝangigis al vera vizaĝaro; juna generacio farigis japan parolantaro (Nihongo-zin).

Ĉina ideogramaro en moderna japanio estis/estas asimila aparato de minoritaro en japana teritorio, kaj ideograma nomaro de logantaro kaj terenaro estis/estas legitimilo de tiu japanece. (Esperanta resumo tradukita el japana resumo)
esenca vortoj: idioma lingvakulturo, ortografia prononco, japana ĉinaideogramaro